

日中漢字比べ

講師 佟岩

「独占禁止法」という法律がある。健全で公正な競争を守るための法律だ。中国ではこれを「反壟断法」という。中国語にも「独占」という言葉はあるが、あえて「壟断(壟断)」と表記する。

「独(獨)」は、「犬」と「蜀」からなる。「蜀」は青虫を指す。犬も青虫も群れず、一匹で行動する。それで「独」は、ただ一つ・一人を意味した。「占」は、「卜」と「口」からなる。「卜」は占いで、亀の甲の特定の点に印をつけることだ。そこで「占」には、物や場所を自分のものにするという意味が派生した。

「独占」は文字通り、独り占めだ。中国では「独占一个房间(一部屋を独占する)」のように用い、つねに悪い意味であるとは限らない。

「独占」と「壟断」

一方、「壟」は、「龍」と「土」からなり、龍の背のようにうねった地形、見晴らしのよい小高い丘を指す。「断」の左側はつながった糸、右側は斧でスッパリと切ることを意味した。

そして「壟断(壟断)」という言葉は戦国時代、ずる賢い商人が小高い丘から市場を見下ろし、よく売れる商品や有利な場所・相手を見定めて利益を独り占めした故事から生まれた。「壟断(壟断)」は、人とのつながりをスッパリ断ち切る計画的・策略的な独り占めだ。

日本にも中国にも「独占資本(壟断)」があり、多くの利益を独り占めしている。もう少し民衆にも利益を分けてもらいたいものだ。

(西日本華文教育者協会理事)



初のオンライン開催の第3回「日中ユースフォーラム」

日本僑報社 オンラインでフォーラム

ポストコロナ時代の若者交流

日本僑報社は、第3回「日中ユースフォーラム」を昨年11月20日午後、初めてオンラインで開催しました。これは、同社が主催する「中国人の日本語作文コンクール」を忘

れられない中国留学・滞在エピソードの受賞者に、それぞれ貴重な体験談を語ってもらい、相互理解を深めるとともに、両国の交流促進へのヒントを探ろうとするもの。

とくに今回は「ポストコロナ時代の若者交流」をテーマとして、若者らしいフレッシュな提言を発表してもらいました。

初回のオンライン・フォーラムには、日本と中国はじめアメリカ、フランス、カナダ、シンガポールなど世界6カ国から100人余りが参加。インターネットを通じた若者交流への関心が高まっていることがうかがえました。

フォーラムではまず、中国に着任したばかりの垂秀夫日本大使の祝辞を披露。垂大使は、「若い世代の皆さんには、これからも引き続き語学をはじめとする各分野で研鑽を積み、日中関係の担い手、両国間の懸け橋となるよう期待する」と、励ましの言葉を述べました。

続いて、同じく留学経験をもつ近藤昭一衆議院議員と矢倉克夫参議院議員、本フォーラムの協賛団体である東芝国際交流財団の大森

圭介専務理事がそれぞれあいさつ、意欲あふれる「若者パワー」を称賛し、フォーラム支援を続けていきたいと語りました。

報告者には、大連外国語大学4年生の萬園華さんなど中国側6人、会員の池松俊哉さんなど日本側6人が素晴らしい発表を行いました。

「ネットでの交流経験を生かして、新しい豊富多彩な交流方式を創造していくべきだ」と提言しました。

来賓や過去の受賞者によるコメントも行われ、特に16年前の第1回中国人の日本語作文コンクール一等賞受賞者も登場し、話題となりました。

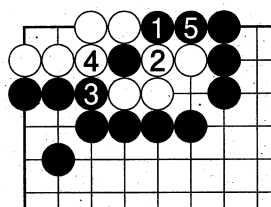
最後に、朝日新聞の古谷浩一論説委員(前中国総局長)が総括し、「皆さんの前向きな企画力、行動力、発信力に触れることができて、感心した。これからも応援していきたい」と、参加者にエールを送りました。

(段躍中)

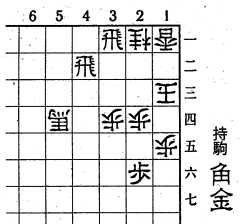
芝国際交流財団の大森

やさしい詰将棋 & 詰碁 解答

詰碁 黒1が好手。黒3の手順が大事。最後は黒5で白死です。失敗は黒1を3に打ち、白4、黒5、白1で生きられてしまいます。



詰将棋 1金△1四玉 2三角△同玉 2二飛成△1四玉 1三竜まで九手詰。



解説 初手 2二角は△1四玉で絶望です。正解は 3三飛成で△同桂に 1二金△同香は 3一角が急所の一撃です。

で△1四玉も 2三角で追い詰めです。

秦可卿：秦館の山芋菓子

秦可卿は寧国府孫世代の長男賈蓉の正室で、小説の第5回より登場し、13回で死去する。彼女の葬式の描写は『紅樓夢』の名場面だが、その死は今でも解かれない謎のまま。

11回には、秦可卿が衰弱して起きられなくなり、冬至が過ぎたある日に仲の良かった鳳姉が彼女の見舞いに行った。鳳姉が見た秦氏は病弱というよりも悩みを抱えているようだった。鳳姉は休養すればきっと良くなると言い、彼女を慰めた。秦氏は良くなるかどうか

13回、その年末のある深夜に、秦氏が鳳姉の夢の中に現れ、賈府の運命を月と水に例えて「月満ちれば則ち欠け、水満ちれば溢れる」と、今は榮華の極みにあるが、将来のことも考えた方が良く、鳳姉に忠告し、別れを告げた。鳳姉は急に目が覚め、秦氏の死を知らせるのに二の門の「雲板」が4回叩かれたのを聞いた。

現在の『紅樓夢』には彼女の死の描写はこれしか残されていないが、『脂硯齋重評石頭記』の13回より著者曹雪芹が彼女のことを数頁も削除したのが脂硯齋の注釈で分かった。とにかく、著者自身が彼女の死因の記述を幾度も改筆し、悩んだ末その内容を残さないことにしたのは事実だ。

12人の美女と日常用品 食べ物から物語る 『紅樓夢』

最終回 倪芹

春になれば分かるだろうと答えた。二人は半日も話して、食事もほとんど摂らない彼女に食べたいものがあるかと鳳姉が聞いたところ、彼女は前日賈母が賜った「秦館の山芋菓子」はどうやら体が受け付けたと言った。すると鳳姉は今度また作って届けようと言事し、秦氏は自分の代わりに賈母たちによりしく伝えるよう頼んだ。二人が実際に会うのはこれが最後だった。

著者は、なぜ秦可卿の死因を明示しなかったのだろうか？華奢に見える女性たちを通して曹雪芹が伝えたかったのは一体何だろうか？

12人の美女を通して見る『紅樓夢』の連載はこれで最終回。2月からは視角を変えて引き続き中国の白話小説を楽しみましょう。では今年もどうぞよろしく！

2月12日は春節だ。ここで読者の皆様に祝辞を申し上げます。牛年吉祥！萬事如意！

(京都大学大学院経済学研究科シユニアリサーチャー)



「大公鶏」(挿絵=張鉄紅)